

公開講演会

一八世紀イギリスの名望家支配と地域社会

— サフォーク州のジェントリ デイヴァーズ家の事例を通して —

青木 康

はじめに

本日は最終講義ということで、長年私が意識してきました「一八世紀イギリスの名望家支配と地域社会」というテーマでお話をさせていただきます。最初に、私の研究歴に関連付けて、今回の講義ができたがまでの舞台裏のようなことを少しご紹介させていただきます。

私は一九七〇年四月の大学入学ですが、二年生になる頃には、イギリス一八世紀政治史という今にいたる専攻領域を決めて、その後一九八〇年代の半ば頃まで一貫して、中央政界、特に議会上院を舞台として、政治家がどのように動くか、そしてなぜそのように動くのかという問題関心をもって研究を進めてまいりました。しかし、よく考えてみ

ますと、地元的地域社会で圧倒的に強い支持を得ている政治家と、自分の選出区に不安をかかえた政治家とは、中央政界で政党再編のようなことが起こった場合にも、ふるまい方が違ってこざるをえません。それで、名望家支配と地域社会という本日のテーマが、私の研究のなかでだんだんと大きな意味をもつようになりました。一九九七年刊行の拙著『議員が選挙区を選ぶ』は、一八世紀イギリスの下院議員がしばしばその選出区を変えるという現象に着目して名望家支配と地域社会の問題を検討した成果であるというようにも言えるかと思いますが、その具体的な作業は、一九八〇年代後半から始まっておりました。そして、ちょうどその頃に私は立教大学の史学科に移ってくることになりました。当時の史学科は、西洋史、東洋史、日本史、文

化人類学を含む地理からなる四コース制で、学科教員どうしの日常の会話でも、「自分の研究のフィールドを決めて、地域に入って調査をする」といった話がよく自然に聞かれました。一八世紀イギリス史を研究している私としては、もちろん一八世紀当時の地域社会に実際に入っていないで、そこで生活をしながら観察するというわけにはいきませんが、同時代の史料も使い特定の地域社会にできるだけ密着して考察を行うことで、一八世紀イギリスの名望家支配についての自分なりの理解を固めたいという思いが、より強くなりました。それで、一九九七年度にイギリスにおける一年間の在外研究が認められて、自分が注目する地域に実際に頻繁に出かけていくこともできるという状況になった際には、のちに少しふれますプロセスを経て、サフォーク州、とりわけ、その西部の中心都市ベリ・セント・エドマズ市をフィールドに選び、一八世紀に同地域で有力であったジェントリのデイヴァーズ家の事例研究を行うことにいたしました。同地域、同家に関する歴史研究の作業は、一九九七年度以降今日まで断続的に続け、その成果は個別論文の形でもすでにいくつか発表しておりますが、本日は、サフォーク州、またベリ・セント・エドマズ市における有力ジェントリのデイヴァーズ家の事例を素材として用いつつ、一八世紀イギリスの名望家支配と地域社会と

いうテーマについて考えたことをいくつもお話させていた
だきたいと思います。

序論

さて、本論に移りまして、一八世紀イギリスにおいて地主貴族 (aristocracy) が統治階級として中央と地方の政治に対して圧倒的な影響力を行使していたことは、疑いをいれないと思います。爵位貴族と有力なジェントリから構成される地主貴族は、千エーカー、しばしば万エーカー単位の広大な土地を所有し、地域社会の経済に大きな影響を与えるとともに、政治、社会、文化の諸領域で地域社会の指導者としてふるまっております。産業革命によって中流階級が急速な成長をとげるようになるまでの時期のイギリスの地主貴族支配は、これまで比較史的な観点から名望家支配のひとつの典型的な事例として語られてまいりました。しかしながら、地域社会の指導者としての地主貴族が実際にどのような一八世紀のイギリスを支配していたのかという点については私たちの知見は、実はそれほど豊かであるわけではありません。今回の講義では、一八世紀イギリスの地主貴族による地域社会支配の実像にできるだけ個別的に迫ってみたいと思います。

このような観点から一八世紀イギリスの地主貴族個人、あるいは家門 (family) をとりあげた従来の研究を概観してみますと、やはり長い歴史を有する名門の上級爵位貴族や、中央政界でも強い力をふるった大物政治家に關係するものが多いように感じられます。地主貴族の中でも特に大物に偏ったこのような研究史の現状は、彼らについては一般に史料の残存状況がよいといった事情にもよっていると、思われ、史料に基づく実証研究の蓄積という点からは必ずしも否定的のみ評価されるべきことではないと考えますが、それにしても、私たちの一八世紀地主貴族像に一定の歪みを生じさせる危険性のあることは否定できないでしょう。そこで、この講義につながることにした私の研究では、個別的な検討対象とする地主貴族を決定するにあたって、中央政界の大物政治家や名門の爵位貴族は意図的に避けて、むしろ、下院議員として中央政界とのつながりも、ちながら、地元の州社会を主たる活動領域としていた有力ジェントリをとりあげることになりました。

そこで次に、一八世紀イギリス社会のピラミッドのごく薄い最上層部分に属するとはいえ、全国では千の単位で存在していた有力なジェントリの家の中から、実際に個別的な検討対象としてとりあげる家を決定する作業が必要となつてまいります。ここで、その決定プロセスについて詳

細に説明する余裕はありませんが、ジェントリの州社会での活動に着目しようとする趣旨からすれば、検討の対象は、同じ州内に圧倒的な力をもった爵位貴族などが存在せず、州選出議員の選挙にあたってもジェントリの意向が十分に反映されるような州にまずは求めるのが適当であろうと考えられます。また、一八世紀の中の特定の短期間に検討を限定してしまわないという点からは、ある程度長い期間を通じて下院議員を出しているような家の方が望ましいということがあります。こうした点を考慮した結果、私は、イングランド東部のサフォーク州のジェントリで、一六八〇年代から一八〇〇年代にかけて一二〇年余りにわたり同州で大きな影響力をもち、その間下院議員を三人出しているデイヴァーズ家の事例を調べることにいたしました。

このデイヴァーズ家の事例から得られる知見は、もちろん、一八世紀イギリスの名望家支配と地域社会という問題にただちに一般化できるものではありません。しかし、そうした問題についての議論をより精緻にするためにも、これまで不足していた地主貴族家についての事例研究の蓄積がまだまだ必要であると考えられるのです。以下本講義は、次の第一章でジェントリとしてのデイヴァーズ家の歴史を概観した後、第二章以下の三つの章で、一八世紀イギリスの地主貴族の名望家支配にかかわって重要と思われるいく

つかの問題を、デイヴァーズ家、およびその周辺の事例にそくして、とりあげてまいります。第二章は地主貴族への新規参入と、地主貴族家系の継続性の問題、第三章は地主貴族と地域住民の関係の問題、第四章は地主貴族家門相互間の様々な結び付きの問題を扱うこととなります。

第一章 デイヴァーズ家

デイヴァーズ家は、サフォーク州西部の中心都市ベリ・セント・エドマンズ、以下、ベリと略称することが多いと思いますが、同市の近郊に拠点をもち、一八世紀にはベリ市およびサフォーク州で強い影響力をふるっておりました。ジェントリとしてのデイヴァーズ家の歴史は、西インド諸島のバルバドス島の大プランターであったロバート・デイヴァーズが、一六八〇年頃にベリ市近郊に土地を購入したことに始まります。

ロバート・デイヴァーズの経歴についてははっきりしないところがありますが、一六二〇年頃に生まれ、一六三五年に移民として単身バルバドスに渡ったと言われております。同地で成功した彼は、二〇〇人もの黒人奴隷を所有する大プランターとなりました。一六八〇年頃に本国に戻った彼は、まもなくベリ市の東方数キロのラファム

に土地を購入し、ジェントリとしての道を歩み始め、さらに一六八二年には准男爵にも叙されました。しかし、デイヴァーズ家が有力ジェントリ家としてサフォークの州政治にも重きをなすにいたる重要な契機は、一六五三年頃にバルバドスで生まれた息子のロバートが、ラファムに隣接するラシュブルックにラシュブルック・ホールという屋敷をかまえる名門ジャーミン家の娘メアリと一六八二年に結婚したことでした。息子のロバートは、のちほどふれるように、結婚後もバルバドスで官職を受けるなど西インド諸島で暮らしていたようですが、父の初代准男爵が一六八五年に死亡してしばらくすると、本国に引き上げ、義父の第二代ジャーミン男爵トマスとの結び付きを利用して、本格的にサフォーク州のジェントリとしての活動を始めることになりました。

第二代准男爵のロバートは、名譽革命の最中の一六八九年一月に、ベリ市に対して強い影響力をもっていたジャーミンの支持を受けて、同市から下院議員に選出されています。初当選は、いわゆる仮議会（Convention）の時のことでしたが、彼はその後一〇年以上にわたりベリ市を代表するトーリの下院議員として中央政界にもかかわります。官職に就いたことはなかったようです。一七〇一年に一度議席を失ったものの、〇三年の補欠選挙でベリ市選出議員

に返り咲いた彼は、○五年にはサフォークの州選出議員となり、一七二二年一〇月に没するまで、都市選出議員よりも格が高いとされる州選出議員のいすを守りました。

第二代のロバートが下院議員を務めるうち、デイヴァーズ家はベリ市およびサフォーク州における影響力を強めていきました。その途上、彼は、義父が男系の子孫を残さず死亡したことにより、総額三万ポンド以上のラッシュブルックのジャーミン家の財産を一七〇三年に継承することになりました。デイヴァーズ家が一般に「ラッシュブルックのデイヴァーズ」と呼ばれるのはこのためです。ベリ市において同家は、市の北方のユーストンに屋敷を構えるグラフトン公爵のフィッツロイ家、市の西方のイクワースを拠点とし、間もなくプリストル伯爵位を獲得するハーヴェイ家とならぶ有力家となり、この頃ベリを訪れたダニエル・デフォーは「デイヴァーズがこの町を支配している」と記しているほどです。これ以後、ベリ市では、グラフトン公爵家、プリストル伯爵家、デイヴァーズ家の三者鼎立の状態が続くこととなります。

一七二二年に第二代のロバートが死ぬと、その長男のロバートが第三代准男爵となりましたが、彼は翌二三年には子孫を残すことなく死亡してしまいます。このため、第二代ロバートの次男であるジャーミン・デイヴァーズが第四

代准男爵としてデイヴァーズ家を継ぐことになりました。ジャーミンは、父の第二代ロバートが存命中の一七二二年春の総選挙でベリ市選出の下院議員に当選しており、准男爵となって最初に迎えた二七年の総選挙では、サフォークの州選出議員に転じました。父に続いて彼もトリーの有力ジェントリとして、一七四三年に死亡するまで州選出議員を務めました。

第五代准男爵となったのは、ジャーミンの嫡出の息子として是最年長のロバートでした。彼は十代の前半で准男爵位を継いだため、しばらくはジャーミンの未亡人で母のマーガレッタが所領を管理します。第五代准男爵のロバートは二十代半ばにはグラランド・ツアーでイタリアに出かけ、さらに、一七五九年にはラッシュブルック・ホールを第三代クリーヴランド公爵に貸して、六一年頃北米に渡りました。彼は一七六三年にヒューロン湖、あるいはその近くで、インディアンに襲われて不慮の死をとげてしまいます。デイヴァーズ家の財産と准男爵位は、陸軍人となっていた弟チャールズが継承することになります。

第五代のロバート・デイヴァーズは一七五七年にベリ市での補欠選挙に立候補したことがあったものの、下院議員となることはなく、彼の代のデイヴァーズ家は、父ジャーミンの時のような存在感がありませんでした。しかし、弟

のチャールズが第六代准男爵となると、同家はふたたび有力ジェントリとして地域社会で大きな影響力を発揮するようになります。チャールズは一七六八年に、この講義の第四章で述べる協定を第三代グラフトン公爵との間で結び、同公爵の支持を得てドーセット州の都市選挙区から下院議員に選出され、次の七四年の総選挙ではベリ市選出の議員になります。祖父の第二代ロバートと父のジャーミンはトーリの議員として知られていましたが、チャールズはむしろホイッグ系の独立派の議員として活躍し、引退する一八〇二年までベリ市の有権者からの強い支持を一貫して保ちました。一八世紀末のサフォーク州の選挙において、チャールズは自らが州選出議員に立候補することこそなかったものの、候補者指名の集会で候補者の提案者となるなど、州の政治に大きな影響力をふるいました。

チャールズ・デイヴァーズは一八〇二年の総選挙には出馬せず、三〇年以上務めてきた下院議員の地位を離れました。彼はその後もサフォーク州の民兵組織で地区 (division) の司令官となってグラフトン公爵家出身の州長官を補佐するなど、州の有力ジェントリとしての生活を送っていました。議会を去って四年を経た一八〇六年六月に六九歳でこの世を去ります。彼はフランセス・トレイスという女性との間に何人かの子供を残していましたが、

二人は正式に結婚していなかったため、その子供たちにはデイヴァーズ家の財産を継承する権利はありませんでした。彼の財産は、第四代准男爵ジャーミンの娘で、第五代ロバートと彼自身にとっては姉妹にあたるエリザベスの子に引き継がれることになりました。エリザベスは一七五二年にプリストル伯爵家のフレデリック・オーガスタス・ハーヴェイと結婚しており、この結婚から生まれた長男の第五代プリストル伯爵がチャールズ・デイヴァーズの財産を継承します。こうして、デイヴァーズ家の財産は、皮肉にも、一世紀以上にわたって同家と政治的な対立関係にあったプリストル伯爵家の手に渡ることとなりました。しかし、第五代プリストル伯爵はわずか二年後にはラッシュブルックを手放してしまいます。その後、ラッシュブルック・ホールは何回かその所有者を変え、一九六一年に焼失しました。他方、ジェントリの家としては断絶したデイヴァーズ家の名は、ラッシュブルック教区の司祭となっていた、第六代准男爵チャールズの庶子のロバート・デイヴァーズが死亡する一八五三年までは確実にたどることができですが、その後は判然としません。

デイヴァーズ家の歴史を概観したこの章の最後に、バルバドスの有力プランターとしてのデイヴァーズ家のこともごく簡単にふれておきましょう。初代のロバートがイギ

リス本国に戻ってから、息子のロバートの方は一六八二年にバルバドスで植民地評議会の議員に任じられており、初代ロバートの帰国によってデイヴァーズ家とバルバドス島の関係がただちに切れてしまったわけではないようです。八五年の父の死により第二代准男爵となった息子のロバートは、ようやく八七年になって本国に定住するため島を離れますが、この時期にはデイヴァーズだけではなくバルバドス島を離れるプランターが他にも多くいたことが史料上も分かっています。しかしながら、第二代准男爵ロバートについては、本国定住後も、バルバドス島にかかわる政策に関して政府の通商植民委員会で証言するなど、バルバドス島の利害関係者としての立場は続いています。彼は一六九四年にはバルバドス植民地のイングランドにおける代理人 (agent) にも任じられていますが、彼は二五〇ポンドの手当ては断っています。この金額は小ジェントリの年収にも匹敵するもので、既にデイヴァーズ家がこの程度の副収入を辞退するだけの経済的余裕のある有力ジェントリとなっていたことがわかります。年代を下って、第二代准男爵ロバートの三男で海軍人となったトマスも、一七二九年にはバルバドス植民地評議会の議員に任じられています。こうして、デイヴァーズ家とバルバドス島のつながりは、デイヴァーズ家が本国に引き上げてしまった後

も長く続いていました。同家がバルバドス島に有していた財産を最終的に処分したのは、第四代准男爵ジャーミンが当主であった時期のことであると思われる。

第二章 地主貴族層の変動 新規参入と家系の継続性の問題

イギリスの地主貴族がヨーロッパ大陸の貴族と較べて特に開放的 (open) であったかどうかは、これまで歴史学でもしばしば議論の対象になってきており、近年は、イギリスの特殊性を強調することに慎重な見解が有力になってきているように思われます。ここでは、もちろん正面からこの問題をとり扱うことはできませんが、デイヴァーズ家の事例の検討から、名望家支配の性格とも深くかわる地主貴族層の開放性、別の言い方をすれば新規参入の難易度の問題および、それと深く関係する地主貴族家系の継続性の問題について、若干の考察を行なってみたいと思います。前章で見たように、西インド諸島のバルバドスで財をなしたデイヴァーズ家は、本国に戻り、創始者の息子の代には州選出議員を出すような有力ジェントリとなりました。この事例は、非地主貴族の成功者が真正の地主貴族への上昇に成功した例として、イギリスの地主貴族の開放性や開

鎖性について議論している者の関心をひくものです。このデイヴァーズ家の上昇について、まず確認しておきたいのは、この上昇が全体として比較的短期間のうちに達成されたものの、それでも明らかに三つの段階を経ているという点です。デイヴァーズ家では、まず、初代准男爵のロバートが植民地で獲得した富で本国に土地を購入し、ジェントリとして認められる最低限の条件を満たしました。これを第一の段階としますと、第二の段階では、彼の子の第二代ロバートが、父ロバートの土地購入から二、三年後に自らの結婚を通じて、地元の名門であるジャーミン家との結び付きを得、その後だてによって、まもなく州全体、さらには国の政治にも関与するようになりました。そして、第三の段階、ジャーミン家の断絶により同家の財産を継承したロバートが州選出議員に当選し、デイヴァーズ家が地域社会で真に有力な家門として文句なしに認められるようになるというのは、初代ロバートの最初の土地購入からほぼ四半世紀を経た後のことであつたのです。

このようなデイヴァーズ家の地主貴族層への参入にあつては、既存の有力者の後だて、特に第二代ロバートの妻の実家であるジャーミン家のそれが決定的な意味をもちました。一七世紀末から一八世紀初頭には、有力者が地元教区の有権者をひきつれて州選挙の投票に出かけるといっ

た事例も見られ、有力者の地元教区の票の多くは、その有力者が支持する候補者に投じられるのが普通であつたと考えられるのですが、一般の有権者が社会的上位者の意向にそつた投票行動をしがちであつたという当時の状況下では、ある程度広い地域で新たに政治的影響力を獲得しようとするれば、まずは、それ以前から地域社会でよく知られた地主貴族によつて州政治の場に招き入れられるということがきわめて重要であつたと思われまふ。第二代准男爵のロバート・デイヴァーズは一六九〇年の州選出議員選挙への出馬を機に州政治に本格的に登場するのですが、その際には、義父のジャーミンと初代グラフトン公爵という二人の大物がわざわざイプスウィチまで出向き、彼を候補者として州内のトーリ系の人々に紹介したのでした。

こうして、デイヴァーズ家は州政治に登場したのですが、その本拠地にごく近く、また州都イプスウィチとならんで州内で特別な重みをもっていたペリ市での支持が州政治におけるその発言力を確保する上でもきわめて重要であつたことは言うまでもないでしょう。第二代准男爵のロバートは、ここでもジャーミン家の影響力を引き継ぐ形で急速に勢力を増していきました。既に述べたように、彼はペリ市選出の議員を一五年近く務めた後、より格の高い州選出議員に転じることに成功するのですが、サフォーク州の下院

議員選挙においても多くの有権者をかかえるベリ市は大票田でした。一七〇二年、〇五年、一〇年、二七年の四回の総選挙で投票したベリ市に土地をもつ有権者のうち、どれくらいの割合の有権者がデイヴァーズ家出身の候補者に投票したかを調べてみると、その支持率は最低でも四〇パーセント程度はあり、最後の二七年では七〇パーセント以上にまで上昇しているのです。ベリ市に住む人々の間でのデイヴァーズ家の評価の高まりがうかがわれる結果と言えましょう。

ベリ市での支持が固まるとともに、デイヴァーズ家の勢力は、サフォーク州内の他の地域にも広がっていきました。それを示すと思われるのが、州内の他の都市選挙区で、デイヴァーズ家の人間が有権者として受け入れられていつていることです。のちに述べますように、ベリ市においては市選出下院議員選挙の有権者は同市の自治体を構成する少数の市民に厳しく限定されていたのですが、他の都市選挙区では、むしろ独立性をもった選挙区としての体面を保つというねらいもあって、市内に居住していない州内のジェントリを選んで有権者とするのが広く行なわれていました。一七〇〇年代の半ばには、第二代准男爵のロバートと、その次男で後に第四代准男爵となるジャーミンはイプスウィチで有権者となっており、この頃にはデイヴァーズ家

の名望が、既にベリ市の周辺にとどまるものではなくなっていたことが感じられます。こうして、デイヴァーズ家は上述の上昇の第三段階に達するのです。

もちろん、このような新興のデイヴァーズ家の勢力の増大には反発もありました。例えば、バルバドスで教育を受けた第二代准男爵のロバートには、本国の地主貴族の家に生まれた若者の多くが経験したパブリック・スクールや大学における教育の経験は当然ありませんでしたが、この点が攻撃の対象とされました。例えば、一七〇二年の総選挙の際、サー・リチャード・ギブスは、ロバートの書く英語について、「自分の子供が六、七歳にもなつて、こんな風にしかなければ、鞭で打つだろう」と酷評し、こんな人物を州選出議員にするのかと揶揄しています。

このような反発を受けながらも、第二代准男爵のロバートは、サフォークの州選挙区と同州内の七つの都市選挙区で一六九七年から一七一五年の間に行なわれた選挙に都合一六回立候補し、無競争当選を含めて、そのうち一二回は当選しました。当時サフォークにおいて、これだけの回数、州内の下院議員選挙に出、また当選した人物は他におらず、デイヴァーズ家の急速な勢力の増大が感じられます。しかし、他方、無競争当選が非常に多かったこの時期に、彼は一六回の選挙中一回は対立候補と議席を争い、うち四回

は落選の憂き目もみているのです。対立候補と戦った回数でも落選の回数でも、実は彼はサフォーク州内で第一位でした。ロバートの選挙への積極的な関与は、彼が州内の人々に自らの指導的地位への上昇を認めさせるために、必死に戦った軌跡でもあったのです。

第二代准男爵のロバート・デイヴァーズにとって幸いなことに、彼が生きていたのは、イギリス政治上でも特に有名なホイッグとトーリの激しい抗争の時代でした。選挙が頻繁に行なわれ、家柄や伝統よりも自派の勝利が優先される激しい党派抗争の時代であったことが、新興のデイヴァーズ家の急速な勢力増大を助けたとも言えるのです。しかし、オランダからの移住者で、一七五二年に所領を購入した後、近くの都市選挙区ダニッジを支配するようになったヴァネック家の場合は、このような条件に恵まれていませんでした。一七九〇年の総選挙で州選出議員に立候補して落選したサー・ジェラード・ウイリアム・ヴァネックは、依然として「オランダ人お断り」といった感情的な攻撃を受けていました。移住第一世代である父親のサフォーク州への定着から四〇年近くが経過し、また、自らは名門イートン校に学んだ後、既に二二年間にわたってダニッジ市選出の下院議員を務めていたにもかかわらず、ヴァネックはまだ州選出議員となるにふさわしい真の地主

貴族の一員というようには認められていなかったと考えられます。彼はこの総選挙後、サフォーク州のジェントリ社会からも排除され、翌年失意のうちに死亡してしまうのです。これとは対照的に、既に立派なカントリ・ジェントルマンとの世評を得ていた第六代准男爵のチャールズ・デイヴァーズは、この一七九〇年の総選挙では、やはり名門出身の候補者、第六代准男爵チャールズ・バンベリの陣営で重要な役割を演じていました。デイヴァーズ家は州政治へのその登場から約一世紀を経て、文句なしにサフォーク州の旧家として認められるようになっていたのです。

以上のように、相対的には急速な上昇に成功したと考えられるデイヴァーズ家の例を見ても、ジェントリ、特に地域社会の支配者となる有力ジェントリ集団への参入の過程は、それなりの困難をともなう、ある程度時間のかかるものでした。しかも、こうした苦労の結果ようやく得られた地主貴族の一員としての地位を、世代を超えて維持していくのは、それほど簡単なことではありませんでした。実際、デイヴァーズ家も、世代でいうと第四世代にあたる第六代准男爵チャールズの死をもって、ジェントリの家としては消滅してしまふこととなります。

ここで、ジェントリとしてのデイヴァーズ家の歴史を家の継承という点を中心にふりかえっておくと、まず、初代

ロバートには息子がひとりしかいませんでした。一人息子のロバートは無事に成人して第二代准男爵となり、複数の息子を残しましたが、その長男の第三代准男爵のロバートは、父の死後半年あまりで死亡してしまいます。彼はまだ結婚しておらず、子孫を残さなかったために、准男爵位は彼の死後、すぐ下の弟のジャーミンに継承されました。第四代准男爵となったジャーミンは多くの息子をもうけたのですが、結婚の時期についてはあいまいな部分があり、ジャーミンはまだ若い時に生まれたふたりの息子は嫡出子として認められていません。結局、一七三〇年頃に生まれたロバートが第五代准男爵としてジャーミンの後を継ぐのですが、実際にはロバートは父ジャーミンの三男であったと思われる、父が五〇代半ばで死亡した一七四三年の時点ではまだ一五歳にもなっていませんでした。第五代准男爵のロバートが成人に達するまでの間、先にも述べましたように、デイヴァーズ家の所領の管理はジャーミンの未亡人であるロバートの母マーガレッタに委ねられています。さらに、ロバートは成人後も結婚せず、ラシユブルック・ホールを他の地主貴族に貸して、最後には北米に渡って死んでしまいましたから、一八世紀半ばには、地域社会におけるデイヴァーズ家の影響力は低下したのです。

一七六三年にロバートが死亡すると、弟のチャールズが

第六代准男爵としてデイヴァーズ家を継ぎ、まもなく下院議員になるなど、前の章で概観したように、地域社会における同家の影響力は再び強まることになりました。しかし、家系の継続という点では、チャールズは正式の結婚をしなかったことで、ジェントリとしてのデイヴァーズ家の断絶を決定づけてしまいます。彼には陸軍人としてアメリカに渡っていた時期に結婚をしていたといううわさがあり、帰国後はフランセス・トレイスと家庭をもったものの、この二人は正式には結婚しませんでした。このため、彼の子どもたちには同家の財産を継承する権利はなく、彼の死をもってデイヴァーズ家の財産は姉の嫁ぎ先であるプリストル伯爵家に渡ったのです。

デイヴァーズ家の家系が一二〇年余りにわたって継承され、結局断絶にいたった過程をこのようにふりかえってみただけでも、一八世紀イギリスの地主貴族家門が家系の継続と地域社会における影響力の保持ということについてけっして安心できる状況にはなかったことがすぐに理解されるでしょう。デイヴァーズ家の例で言えば、第四代准男爵ジャーミンから第五代ロバートへの継承の場合にあたりますが、先代当主が死亡した時点で継承者が未成年であれば、家門は続いて、その政治的影響力の低下は免れませんでした。ましてや弟やいとこなど傍系の継承権者をもた

ない地主貴族家の当主が、何らかの理由で正式な結婚をしなかった場合、結婚をしても息子が誕生しなかった場合、あるいは息子をもうけても、その息子が早世したような場合には、家系の継承自体がただちに危険となります。デイヴァーズ家の場合、第三代准男爵ロバートと第五代准男爵ロバートも家系を継承すべき息子をもちませんでした。が、それぞれ弟がいて、ことなきを得たわけですが、第六代准男爵のチャールズの場合、兄の死で准男爵位を継いだ時点ではさらに下の弟がいたものの、この弟はチャールズ本人より先に子孫を残さず死亡してしまつたため、同家はチャールズの死とともに断絶となりました。

デイヴァーズ家の周辺でも、ジャーミン家は男子継承者の不在から、結局その財産は娘を通してデイヴァーズ家に継承されることになりました。また、サフォーク州の名門の出で、一八世紀初頭に第二代准男爵ロバート・デイヴァーズとともに州選出議員を務めていた第四代准男爵トマス・ハマーの財産も、一七四六年の彼の死とともに同家が断絶したため、バンベリ家に引き継がれることとなりました。名門ハマー家の勢力を受け継いだバンベリ家からは、先にもふれたチャールズ・バンベリが早くも一七六一年にサフォークの州選出議員に未成年でありながら当選し、それ以後四〇数年間にわたつてその地位を保つのです。

このように、家系の断絶は、地域社会において強大な力を長きにわたつてふるつた地主貴族という常識的な歴史像の裏面にあつて、私たちには意識されることが少ないように思われますが、一八世紀当時としては、多くの家門に起こりうる、きわめて深刻な問題であつたのです。そして、こうした厳しい現実があつたからこそ、サフォーク州で言えば、ブリストル伯爵、すなわちハーヴェイ家や、既に一六世紀から州選出議員を出していたラウズ家のような、名門中の名門とも言うべき家門には、特別な権威が認められたのです。地主貴族の一員となる過程にも多くの困難がともないましたが、その中でも特に長い歴史を誇る真の名門となるには、さらに歴代当主の自覚的な努力と幸運とが重ならなければならなかつたといふことでしょう。

一八世紀イギリスの地主貴族による地域社会の支配を、個々の家門による支配としてのみ考えるならば、それは各家門の家系を継承する男子の誕生という偶然的要素にも大きく依存する、きわめて不安定なものとならざるをえません。それでは、よく言われるように、地主貴族による支配が安定していたとするならば、それは、個々の家門の消長を内に秘めた、地主貴族総体としての支配を考える場合なのではないでしょうか。そこでは、地主貴族の諸家門が密接な結び付きをもつて立ち現れざるをえないことになりま

す。その点の検討は、この講義では第四章で行なうこととし、その前に次の第三章では、地主貴族と地域住民の関係について見ておくことにしたいと思います。

第三章 地主貴族と地域住民

第三章に移って、地主貴族の一員となることに成功し、一世紀余りにわたりサフォーク州、なかでもその西部の中心都市ベリ・セント・エドマンズに強い影響力をふるったデイヴァーズ家が、地主貴族よりは下の階層に属する地域住民とどのような関係をもったかを見てみることにしたいと思います。

デイヴァーズ家は広くサフォーク州内で力をもっていたが、ベリ市選出の下院議員を三人、通算して五〇年近くにわたって出すなど、同家の政治的影響力の重要な拠り所が同家に対するベリ市の支持にあったことは明らかです。そこで、ここでは、同家とベリ市の人々との関係を中心に考えることにしたいと思います。

一八三二年の第一次選挙法改正以前のベリ市で二名の市選出下院議員の選挙に参加することができたのは、市自治体 (corporation) を構成していた市長、市参事会員二二名、評議員二四名の計三七名だけでした。市長だけは毎年、市

参事会員の中から選挙されましたが、市参事会員は終生、評議員も市参事会員になって抜けない限り終生務めるのが一般的でしたから、ベリ市周辺に土地をもつ地主貴族が同市を自らの勢力基盤としようとすれば、まず、市の有力住民の閉鎖的集団であったこの市自治体に対して強い影響力をもつ必要がありました。しかしながら、一八世紀のベリ市では、時期によって勢力分布にはかなりの変化があったものの、デイヴァーズ家、ハーヴェイ (プリストル伯爵) 家、フィッツロイ (グラフトン公爵) 家という複数の地主貴族が勢力を競っていたこともあり、影響力の安定的な確保は容易なことではありませんでした。一七〇〇年前後の時期のように、ベリ市選出のジョン・ハーヴェイと第二代准男爵のロバート・デイヴァーズとがホイッグとトリーに分かれて激しく争い、市選出議員同士が協力して解決にあたるべき地域内の問題をめぐっても、むしろ同僚の悪口を言い合うような状態では、影響力の安定は特に困難なことでした。

逆に言えば、ベリの市自治体は、周辺の複数の地主貴族の勢力争いのおかげで、そのいずれかの家門の完全な支配下に入る運命を免れたとも言えます。一八世紀には、下院議員選挙の有権者が市自治体メンバーに限られるような選挙区のうちの相当数が、特定パトロンの中選挙区に転落

したのですが、ベリはその独立性を維持しえたのです。実際、第二代准男爵ロバート・デイヴァーズは、このような独立性を保持していた市自治体の意向を軽んずる行動をとって、手痛いしっぺ返しを受けたことがあります。彼は一七〇五年の総選挙において、ベリの市自治体が強く反対していたにもかかわらず、サフォーク州とベリ市で重複立候補し、さらに両方で当選すると、州選挙区を優先して市選出議員は辞任してしまいました。このベリ市軽視のふるまいに市自治体は反発し、同市では以後十数年間デイヴァーズ家の人間は一回も当選することができませんでした。他方、このデイヴァーズ家の不人気に助けられてベリ市での影響力を強めえたブリストル伯爵家も、勤勉な選挙運動を怠った一七二二年には、初代伯爵の長男のカー・ハーヴェイを当選させることができず、デイヴァーズ家の候補者に議席を奪われるという苦渋をなめさせられました。このてごわい市自治体を支配しようとした地主貴族は、その構成員の補充の際、自分に近い市民が当選するように働きかけを行なうとともに、そこに自分の代理人 (agent) を送り込んで自らの影響力の維持拡大をはかりました。例えば、第六代准男爵のチャールズ・デイヴァーズは、市の評議員となっていた事務弁護士ジェイムズ・ウオードを自らの代理人に定めていましたし、第三代グラフトン公爵

は、何度も市長を勤めた有力市民のジェイムズ・オークスを代理人としていました。このような有力地主貴族の代理人の地位は半ば公認されたものであったようで、一七八八年一月二四日の市自治体の会議の記録には、デイヴァーズ家に関連する案件の資料をデイヴァーズか、その代理人である評議員のウオードに渡すように決定されたことが記されています。しかしながら、デイヴァーズら地主貴族のベリ市自治体に対する影響力は、そこに自分に近い市民、特に代理人として動いてくれる市民を送り込むだけで保証されるものではありませんでした。というのは、地主貴族が「自分に近い市民」を市の評議員などに当選させても、それによって、市自治体の構成員が、例えばブリストル派とかデイヴァーズ派というように完全に系列化されてしまうということは、一八世紀のベリでは起こらなかったからです。もちろん、いずれかの地主貴族に近いことがはっきりしている市自治体の構成員は少なくなかったですが、それでも、先の一七二二年総選挙の例が示すように、ベリ市での下院議員選挙の票の行方は予断を許さなかったのです。さらに、同様の例をもうひとつ挙げておきましょう。これについては、すでに発表した個別論文でも書いていますが、第二代ブリストル伯爵の弟オーガスタス・ジョン・ハーヴェイは、一七五四年の総選挙と五七年の補欠選挙で落選

と当選を経験しました。興味深いことに、このわずか三年の間に、数人の有権者が彼に対する立場を変化させました。ベリの市自治体構成員が投票行動においてこのような流動性を示した背景には、選挙上の独立性を示すことにより、市自治体の支持を求める複数の地主貴族を競わせ、彼らからより大きな恩恵を勝ちとろうとする意識があったように思われます。この点を厳密に立証することは難しいのですが、少なくとも結果的に、ベリの市自治体と、その構成員が大きな恩恵を受けたことは確かです。プリストル伯爵をはじめとする市周辺の有力な地主貴族は、市自治体全体および個々の構成員への種々の貢献を不断に行なっておりました。

地主貴族による市自治体への貢献には、多様なものがありました。まず、市自治体の決議を国王や議会に提出するといった、ベリ市と国の中央とをつなぐ政治的、あるいは社会的代表機能があります。例えば、第二代准男爵のロバート・デイヴァーズは一六九七年一二月にライズワイク条約締結を祝う声明を、また、第六代准男爵のチャールズ・デイヴァーズは一七八九年に国王ジョージ三世の病氣回復への祝意の声明を伝えることを、ベリ市自治体から要請されています。地主貴族が中央に伝えることを求められるものには、より深刻な政治的対立をとまなうものももちろんあ

り、一七九五年末には、市自治体はフランスとの戦争の継続に批判的な感情をにじませた声明を国王に伝えるよう市選出議員に要請しています。こうした面における貢献は、自治体との良好な関係を維持したいと考える周辺の地主貴族、特に市選出下院議員を務めている者にとっては、きわめて重要なものでした。このため、自分が推薦してベリ市選出の議員に当選させたオーブリ・ポーターという議員がこの義務を果たしていないということで不評をかった際には、初代プリストル伯爵も対応に苦慮しています。

しかし、地主貴族が都市自治体から期待され、そして実際に果たしていたのは、そのような代表機能のみではありませんでした。例えば、ベリ市自治体が財政的に苦境に陥っていた一七世紀末には、当時はまだ自ら市選出議員を務めていた後の初代プリストル伯爵が、五〇〇ポンドもの現金を市に提供していましたし、同じ頃、第二代准男爵のロバート・デイヴァーズも同様の拠出を検討していました。金銭という直接的な形をとらず、市自治体が消費する食材やワインを提供したり、市自治体構成員へ種々の記念品を贈ったりといったこともよくなされました。いずれも、有力地主貴族が気前のいいパトロンとしてふるまい、自分で費用を負担して市自治体の喜ぶことを行なうという意味においては同じことでした。もちろん、地主貴族が宴席を設け、

市自治体構成員を招いて会食することも様々な機会に行なわれていますが、このような会食には市自治体構成員以外の有力市民も参加していることが多いので、のちにベリ市の市民と地主貴族の関係を検討する部分でふれることにします。

一八世紀を通して、一般的にデイヴァーズ家などの地主貴族はベリ市自治体の意向に配慮し、その好意を確保する行動を心がけていたように思われます。しかし、既に述べたわずかな例からも分かるように、すべての地主貴族がつねに市自治体と友好的な関係を築き維持することができていたわけではありませんでした。一八世紀のベリにおいて、市自治体との関係がもっともうまくいっていたと思われるのは、世紀前半の初代ブルistol伯爵ジョン・ハーヴェイの場合と、世紀末葉の第六代准男爵のチャールズ・デイヴァーズの場合であったと考えられます。ジョン・ハーヴェイは、特に一七一四年のハノーヴァ朝の成立まで、熱心なホイッグとして中央政界の動きにも関心をもっていました。その拠点としても、地元ベリ市は特別な意味をもつ存在であったのです。そのことは、彼が長年書き続けた日記に、ベリ市自治体内の政治的動きや市自治体構成員との交流についての言及がよく見られることから明らかです。中でも、一六九五年に二度目の結婚をした彼が新妻を伴っ

て初めてベリを訪れた際、市自治体構成員が正装で出迎えてくれたと書いている部分には、彼と当時のベリ市自治体構成員との間にあった深い心情的なつながりが感じられます。第二代准男爵のロバート・デイヴァーズは、このようなジョン・ハーヴェイの勢力に対抗していかなければならず、市自治体に対する影響力という点では不利をまぬかれなかったと思われます。

一八世紀末の第六代准男爵チャールズ・デイヴァーズは、この点、祖父にあたる第二代准男爵よりずっと有利な状況にありました。一七七九年に兄の伯爵位を継いだ第四代ブルistol伯爵は、今に残るイクワース館の建築を開始する一七九〇年代までは不在がちでしたし、もう一方の地元の大貴族であるグラフトン公爵の代理人のオークスも、少なくとも公爵の息子が落選のうきめをみる一七九六年の総選挙まで、ベリ市自治体内の勢力の維持・拡大にそれほど熱心ではなかったように思われるからです。その結果、チャールズ・デイヴァーズは二八年間にわたってベリ市選出議員を務めました。その間、公爵家と伯爵家をむこうにまわして、無競争当選か、危なげのない一位当選を繰り返していました。彼は、ベリ市の有力市民で市自治体内ではグラフトン公爵の代理人を務めていたオークスとはグラマー・スクール時代からの旧友でしたし、市長を補佐する同市の

治安官の職にもしばしば任じられるなど、ベリ市自治体とのつながりは非常に親密なものでありました。その親密さは、彼が一八〇二年に引退する際、市自治体がそれまでの彼の貢献に対して特別の感謝決議を行なうという形でも示されたのでした。

しかし、ベリ市を自らの拠点として保持するには、実は市自治体に影響力をおよぼしうるといふことだけでは不十分でした。先にもふれたように、ベリ市の市民の中には、非常に制限的であった市選出議員の選挙には参加できなかったものの、サフォーク州の州選出議員選挙では有権者となつてゐる富裕な人々も少なくなつたからです。ベリ市にとどまらず、広く州社会で指導力を発揮しようとしていたデイヴァーズのような地主貴族にとっては、市自治体の構成員になつていない市民も、やはり支持基盤として無視することのできない存在でした。

一八世紀のベリ市は、優雅な都市生活の文化が発展し、人々が社交生活を楽しんだことで知られており、市民どうしの会食も様々な機会に見られました。例えば、毎年、新市長が選出される日や正式に就任する日などには会食と舞踏会があるのが慣例となつており、ここでは、ベリの富裕な市民と周辺の地主貴族が交流しました。第六代准男爵のチャールズ・デイヴァーズも、こうした会食にはよく参加

しています。もちろん、地主貴族の側がパトロンとして市民に食事を供する機会も多くありました。特に、少なくとも数年に一度は行なわれる市選出下院議員選挙のあとには、有権者である市自治体の構成員はもちろん、その他の市民をも招待した盛大な宴会が催されるのがつねでありました。チャールズ・デイヴァーズにとつては最後の選挙となつた一七九六年の場合、五〇人ほどが食事をともにし、さらにその後の舞踏会には四〇〇人も人が集まつたとされます。これらに出席できない民衆のためには市内でビールがふるまわれ、さらに二人の当選者が合計二〇ポンド以上の硬貨をまいて与えました。第三代グラフトン公爵の次男チャールズ・フィッツロイ卿が当選した一七八七年の補欠選挙の例を見ると、こうした大盤振る舞いは獄中にある人々にまでおよんだようです。

ベリ市の市民からの政治的支持を望む地主貴族は、このように広範な人々に恩恵を与えることを期待されました。そのため経済的負担も小さくはありませんでした。例えば、第六代准男爵チャールズ・デイヴァーズの引退で、グラフトン公爵家とプリストル伯爵家の出身者二人が無競争で当選した一八〇二年の総選挙後に市民を歓待するのにかつた費用は、全部で五〇〇ポンド近くに達していましたが、さすがにこれは空前の金額であつたといふことですが、

この種の費用は当選者間で折半されることになっており、デイヴァーズが市選出議員を続けていた時期においても、二人の当選者は総選挙のたびに一〇〇ポンド以上は負担していたと考えられます。もちろん、ベリ市の人々のため有力地主貴族の出費は、より日常的な形においても見られます。一七九五年二月、貧民救済のための慈善の舞踏会がベリ市で開かれましたが、一般の会費が五シリングであったのに対して、市選出の両下院議員はその二一倍にあたる五ギニを支払っていました。さらにまた、一八〇二年の初頭に行なわれた貧民救済事業でも、当時のデイヴァーズ家とプリストル伯爵家の市選出下院議員、さらに次期総選挙で立候補が予定されていたグラフトン公爵家の一人の計三人だけは、特別高額の二〇ポンドをそれぞれ拠出しておりました。この突出した金額に、デイヴァーズ家、プリストル伯爵家、グラフトン公爵家という三家のベリ市における特別な位置がはつきりと示されていると言つてよいと思われます。

ベリ市を支持基盤とする有力な地主貴族は、限られた数の市自治体構成員よりもはるかに多く、かつ多様な人々に対して恩恵を与えなければなりませんでしたが、そうした人々を政治的に代表する機能は地主貴族が果たすべきもつとも重要なもののひとつでした。ベリ市の経済的発展に役

立つと考えられた道路改良、水路建設等の要求をはじめ、市の住民からは、多くの政策的要求が出されました。これを受けて、住民が求める立法を成立させ、反対する政策の実現を阻止するのが、中央政界とのつながりをもった地元有力地主貴族の仕事であったわけですから、地元で強い支持を得ていた第六代准男爵のチャールズ・デイヴァーズは、この点でも熱心でした。例えば、一七八九年に州東部のストウマーケットと州都イブスウィチを運河でつなぐ計画が進められた際、ベリ市にまで水路を延長するよう要請することになったのですが、彼はそのためベリの住民集会で議長を務め、その集会の決議に従つて、計画の推進者との協議のためにオークスとともにストウマーケットまで出かけていきました。また、デイヴァーズは、オークスが特に強い関心をもっていた羊毛輸出規制立法の議会審議に際して、一七八七年三月には、オークスに同行して、急きよロンドンに出かけたりもしています。

ベリ市選出、あるいはサフォーク州選出の下院議員が、このように地域社会の利害を推進する活動に力をいれるのは当然のことでしたが、地元の地主貴族としては、たとえ他州の選挙区から下院に選出されている場合でも、ベリ市の利益をはかることが重要でした。例えば、第六代准男爵のチャールズ・デイヴァーズは、一七七〇年の時点では、他

州の都市選挙区選出の議員であったのですが、この時成立したサフォークのサドベリ・ベリ間の道路改良立法の制定に参与しています。興味深いのは、まさにこの立法によって設置が認められることになった道路管理団体の有給の役員に、ベリ市自治体でデイヴァーズの代理人を務めていたウオードがその後就任しているという事実です。この役員人事の背後にデイヴァーズの政治的な関与があったかどうかは別にして、この事例から私たちは、地主貴族の中央政界における活動が、単に地元の人々の利害を代表するということだけではなく、地域社会内の自分の支持者が享受する利権を確保するという、より露骨な政治的意図をもったものでもありえたことを理解すべきでしょう。

最後に、より広くサフォーク州の住民とデイヴァーズ家のかかわりについてもごく簡単にふれますが、そこでもベリ市の人々についての場合と同様のことが言えるように思われます。地元の有力な地主貴族としてデイヴァーズ家が州の住民に対して一定の影響力を行使しえた背景には、デイヴァーズ家の人々の様々な努力があったのであり、州の場合、その規模の大きさから、経済面をはじめとする負担は、ベリ市の場合以上に重いものとなったと考えられます。

これも別に活字論文でご紹介していることですが、アメ

リカ独立戦争末期にサフォークで行なわれた募金活動は、そのよい例を提供してくれます。一七八二年八月五日、サフォークの州集会で、州の住民の自発的寄付をつのり、危機にある国家のために艦船を建造することが決定され、そこから募金事業が開始されました。この事業はわずか二カ月で約二万ポンドを集めることに成功したのですが、第六代准男爵チャールズ・デイヴァーズは、二四人いた州集会の呼びかけ人のひとりであり、集会の場ですぐに二人の州選出議員と同額の三〇〇ポンドの寄付を申し出ています。これは小規模なジェントリの年収にも匹敵する額で、拠出額がこの金額を上回ったのはプリストル伯爵、グラフトン公爵、コーンウォリス伯爵、そして巨富で知られた前述のヴァネックだけでした。ベリ市の有力市民のオークスも集会の呼びかけ人に名を連ねてはいましたが、その寄付金額はずっと小さな二〇ポンドにとどまっていました。

州内でも有数の有力ジェントリとしてのチャールズ・デイヴァーズの発言力は、このような経済的裏付けがあって維持されていたのです。もちろん、デイヴァーズ家の財力はこのような表の世界でだけ誇示されたわけではなかったと思われまふ。一七一〇年の総選挙の際、州選挙区で当選した第二代准男爵ロバート・デイヴァーズに対して、落選した候補者は、デイヴァーズが支持者に一ギニずつ渡し、

総額では一五〇〇ポンドは使っていると非難しました。この非難自体の真偽はともあれ、州全体に政治的影響力をもとうとすれば、このように大きな財政的負担が想定されました。第六代准男爵のチャールズは、祖父や父とは異なり、自ら州選出議員になろうとはしませんでした。州の選挙では候補者指名のための州集会で繰り返しバンベリの推薦者を務めるなど、州における政治的発言力を保持し続けていました。州住民の力を結集する募金事業に際し、先頭に立って多額の寄付をすることは、そのような有力地主貴族にふさわしいものとして強く求められる行為、別の言い方をすれば、逃れることのできない負担だったということなのです。

第四章 地主貴族層内の結び付き

この講義ではこれまで、主にデイヴァーズ家の具体的事例によりながら、地主貴族家系の変化と継続の問題、そして地主貴族と地域住民の関係について、検討を行ってまいりました。そこに見られたのは、デイヴァーズ家をはじめとする一八世紀イギリスの地主貴族をとりまいていた厳しい現実でした。これまでの検討を踏まえて、あらためてデイヴァーズ家やその周辺の人々の様々な行動をながめてみ

ると、当時の地主貴族による地域社会の支配というものが、個々の家門単独の力ではほとんど維持しえないものであったように思われます。そこからは、州に代表される地域社会のなかで、爵位貴族や有力ジェントリの諸家門が様々な形で相互に密接に結び付くことよって、ある程度の安定がようやく得られていたのではないかという見方が出てまいります。その点を確認すべく、この第四章においては、地主貴族層内の諸家門の結び付きの問題を、デイヴァーズ家およびその周辺に見られる事例にそくして、考えてみることにしたいと思います。

地主貴族の家門同士を結び付ける要素として従来から強調されてきたのが、子女の婚姻を通じて形成される姻戚関係です。デイヴァーズ家が社会的に上昇する過程においても、名門ジャーミン家との姻戚関係が決定的な意味をもったことは、この講義の第二章で述べたとおりですが、そうした婚姻を通じての関係は、デイヴァーズ家がサフォーク州の地主貴族の一員として周囲から認められるようになったのちも、同家がその地位を維持し、さらに地域社会で広く影響力を行使していく上で、やはり重要な役割を果たしていたように思われます。

地主貴族層に属する男女の婚姻は、当然両家の社会的なつながりを互いに拡大することを意味しましたが、よく知

られているように、それは多くの場合、土地財産の移動をもともなっていました。この財産移動は、一八世紀の初頭に断絶したジャーミン家や、その一世紀後に同様の運命をたどったデイヴァーズ家の例のように、一方の家門の断絶、断絶家門の家産の他家門による継承という極端な形をとることもありましたが、むしろ日常的には、姻戚関係に入った家門間の法的、経済的関係の深まりを意味しました。第四代准男爵ジャーミン・デイヴァーズの娘エリザベスと第二代プリストル伯爵の弟が結婚したことにより、プリストル伯爵家と、断絶する以前のデイヴァーズ家とは、持参金の支払いや土地の貸借という関係をもたざるをえないことになったのです。さらに、次のような事例も見られます。

第二代准男爵のロバート・デイヴァーズは一七〇〇年代の後半にラシュブルックに移り、ジェントリとしての同家の誕生の地であったラファムの土地は売却してしまうのですが、その売却先は、一七〇五年に自分の娘のメアリと結婚していたクレメント・コランズという人物でした。コランズは義父と同じくトリーで、一七〇八年からサフォーク州内のオーフオード市選出の下院議員を務めた人物でしたから、デイヴァーズ家が、おそらくは経済的な必要からラファムの土地を手放しても、少なくとも売却からしばらくの間は、同家がラファムともある程度のかかわりを維持できた

もの想像されます。一八世紀のイギリスでは地主貴族が複雑に絡み合った姻戚関係の巨大なネットワークを作り上げていたことはよく指摘されるのですが、そこには、結婚を契機に生まれた様々な経済的な関係も必然的に付随していたのです。

こうした地主貴族家門間の複合的な結び付きは、各家門が有していた種々の人事推挙権 (*patronage*) を姻戚関係に入った家門のために行使してやることでいっそう強められたと考えられます。例えば、教会の聖職禄についてみると、一八世紀のイギリスでは、聖職者が選挙などの際の地域住民の行動に強い影響をおよぼしましたから、聖職者人事への発言権は地域社会を支配しようとする地主貴族にとっては重要な政治的資源であったと言えます。同時に、聖職禄は、家産を継承することができない地主貴族の次男や庶子などに恥ずかしくない生活を保障する貴重な収入源でもありました。デイヴァーズ家はラシュブルック教会などの聖職禄の推挙権を有していましたが、それによって、第六代准男爵のチャールズ・デイヴァーズは自分の庶子のロバートをラシュブルックの司祭とすることができていました。そして、デイヴァーズ家がその影響力を、姻戚関係にあった他家門の出身者のために行使してやった例も見られるのです。一七〇四年に第二代准男爵ロバートが、

国務大臣ロバート・ハーリへの書簡で、年二〇ポンドになる近在の聖職禄に推薦している人物は、妻メアリの姉妹が嫁いでいたサー・サイモンズ・デューズの甥でありましたし、一七二四年に第四代准男爵ジャーミンの推薦でラッシュブルック教会の司祭となったジョン・サイモンズは、やはり第二代准男爵ロバートの妻メアリの姪の夫でした。

デイヴァーズ家によるこのような人事推挙権の行使と裏腹の関係にあったのが、姻戚関係にある家門からの同家に対する政治的支持です。例えば、先のデューズは一七〇二年の総選挙にあたって、第二代准男爵ロバート・デイヴァーズと対立していたホイッグの候補者から支持を要請されましたが、既にデイヴァーズとその盟友のトリーの候補者へ支持を約束しているとして、はっきりと要請を断っています。聖職禄の提供などで強化された姻戚関係は、サフォーク州の地主貴族社会にとっては相対的に新参者であるデイヴァーズ家が、州内でその政治的な影響力を強めていく上で大きな意味をもっていたのです。

しかも、実は、ここまで述べてきたような地主貴族家門間の複合的な結び付きというものは、近い姻戚関係にあった家門同士に限定されるものではありませんでした。一八世紀後半のデイヴァーズ家とプリストル伯爵家のように、姻戚関係にある家門どうしが政治的には競合、あるいは対

立するという場合も少なくなかった一方で、地域社会内の地主貴族家門間では、たとえ姻戚関係はなくとも、様々な結び付きがしばしば生じていたのです。例えば、地主貴族は、特に家族の婚姻にともなう場合に限らず、所領経営の効率化などの目的から、土地の交換や売買を行なっていました。もちろん、しばしば強調されてきたように、イギリスでは地主貴族家門の土地財産は、厳格継承財産設定 (strict settlement) によってその散逸が効果的に防止されていきました。しかし、当時の土地所有制度は、所領の統合といった合理的な目的のために、土地財産の一部を売却したり、他の地主貴族と交換したりすることまでまったく不可能にしまうほど硬直したものではなかったのです。例えば、第二代准男爵ロバート・デイヴァーズの三男で海軍人となっていたトマス・デイヴァーズは、プリストル伯爵家の本拠地であるイクワースに近いリトル・ホリンジャー・ホールを所有していましたが、ここはトマスの死後に第二代プリストル伯爵に売却されています。また、ジェントリとしてのデイヴァーズ家が絶えたあとの話になりますが、ラッシュブルックを手に入れた第五代プリストル伯爵は、その後まもなく、その名前が示すように、この土地とは古くからかわりをもっていたラッシュブルック家との間で土地の交換を取り決め、一八〇八年にはラッシュブルック

を手放して、やはりイクワースに近いリトル・サクサムをその所領に加えたのです。

もちろん、地主貴族家門間の関係は、このような協力的、あるいは協調的なものばかりではありませんでした。地域社会における指導権をめぐる、近隣の爵位貴族や有力ジェントリが政治的に対立するというものもしばしば起こったことでした。既に述べたように、サフォーク州西部でもベリ市を中心に、グラフトン公爵家、プリストル伯爵家、デイヴァーズ家の勢力が鼎立し、三家はベリ市自治体と市の住民の支持を求めて競い合う関係にありました。しかしながら、地主貴族どうしがいたずらに対立を激化させることには非常に大きな危険がともないました。というのは、地域住民の支持を激しく競い合えば競い合うほど、他家を出し抜くために、より大きな出費も覚悟しなければならなかったからです。一八世紀のイギリスでは、下院議員選挙の費用をはじめ、様々な政治的出費の高騰から、地主貴族の家計が危機に陥った事例も少なくありませんでした。デイヴァーズ家でも、第四代准男爵のジャーミンの代には家計が苦しくなり、一七三二年にはのちにふれるシュヴリの土地を売却しています。

激しい政治的対立を続けることにはこのような危険がありましたから、本来は敵対的關係あるいは競合関係にある

地主貴族家門どうしが、競争選挙を避けるために選挙用の特別な取り決めを結ぶ場合もありました。この講義でとりあげているデイヴァーズ家は、その典型的事例を提供してくれます。まず、一七六一年の総選挙の前に、第五代准男爵のロバート・デイヴァーズは第三代グラフトン公爵と協定を結ぶことで、グラフトン公爵家の候補者をプリストル伯爵家の候補者とともは無競争で当選させました。さらに、六八年の総選挙の前には、第六代准男爵のチャールズがグラフトン公爵とあらためて協定を結んで、ベリ市における競争選挙回避を継続するとともに、他選挙区におけるチャールズ自身の議席の獲得に成功しています。その後、公爵との協定が更新されることはありませんでしたが、チャールズ・デイヴァーズは一七七四年には地元ベリ市で無競争当選をはたし、一七九〇年の総選挙においてもグラフトン公爵の息子のチャールズ・フィッツロイ卿と協力して選挙運動を進めていましたから、両家間の協調的な関係はある程度継続したように思われます。その結果、両家の候補者にはじき出される形で、プリストル伯爵家の人間は一七七五年以降ほぼ二〇年間にわたってベリ市では当選することができませんでした。

グラフトン公爵家とデイヴァーズ家の二度にわたる選挙協定は、一七六八年総選挙前の協定文が明言しているよう

に、けつして両家の勢力の完全な融和や合体を意味するものではありませんでした。両者は、ベリの市自治体における相互の勢力を認めあつた上で、激しい選挙戦になることを避けるために協力を約束したのです。父は州選出議員であつたとはいえ、地方の一ジェントリにすぎなかつたチャールズ・デイヴァーズが、二度目の協定締結時は事実上の首相を務めていた大貴族のグラフトン公爵と対等に協定を結ぶことができたのは、ベリ市におけるデイヴァーズ家の勢力が相対的にしつかりとしていたからでした。その勢力が侮りがたいものであつたことは、先にふれた一七五七年の補欠選挙での善戦からも明らかでした。

他方、選挙上の対立関係が長く続いていたデイヴァーズ家とプリストル伯爵家の間でも、協力関係の片鱗は見られました。まだ両家が姻戚関係に入る以前の二七四〇年代初めに、初代プリストル伯爵ジョンは、第四代准男爵ジャーミンの弟である海軍の高級士官トマス・デイヴァーズに丁寧な手紙を送っています。これは、海軍人としての生涯を歩み始めていた伯爵の孫のオーガスタス・ハーヴェイに対する庇護を求めていることでしたが、この例に示されているように、地主貴族は、たとえ厳しい対立関係に長くあつた家門どうしであつても、近隣の地主貴族間のつながりは何らかの便宜を得るためには十分利用可能なものと考えてい

たのです。

これまで紹介した若干の事例からもうかがわれるように、近い姻戚関係の有無にはかかわらず、近隣の地主貴族の家門間で経済的、あるいは政治的な協力関係が結ばれるというのは、一八世紀のイギリスではよくあることでした。そして、そうした地主貴族家門間の結び付きを容易にしたものとして、当時の地域社会において、場合によっては中流階級の上層部分をもまきこんだ形で幅広く行なわれていた社交生活がきわめて重要な意味をもつていたことをぜひ指摘しておきたいと思ひます。一八世紀のベリ市では社交生活がさかんであり、会食が様々な機会に行なわれたことについては、先にも言及したので、ここでは、特に地主貴族にとつて重要な社交の機会になつたと考えられる狩猟のことに簡単にふれておくことにします。

狐狩りに代表される狩猟が多く、地主貴族の好むスポーツで、彼らの社交のよい機会となつたことは、よく知られています。狩猟は確かに地主貴族の独占物ではなく、地域社会の中流階級には様々な形で参加が認められていました。しかし、それはあくまでも地主貴族の主導下に行なわれるものでした。中でも、狩りの影響を受ける広大な地域の人々との関係の調整という困難な課題をとまなわざるをえない狐狩りには、組織者の指導力が特に求められていま

した。それゆえ、有力な地主貴族にとって、狐狩りは地域社会における自らの影響力を強める手段であり、また、ここでの成功はその影響力の強さの証ともなったのです。第六代准男爵のチャールズ・デイヴァーズは、この狩猟の社会的な重要性をよく理解していたようです。銃をもち猟犬を伴った狩猟家の姿で描かれた肖像画が残されている彼は、一七九〇年一月一六日に、ベリ市の近郊では久しく見ることができなかつたと地元紙に報じられた派手な狐狩りを敢行したのですが、ベリの有力市民オークスは、この日の日記に「デイヴァーズはバンベリのための選挙運動をしている」と記しているのです。この興味深い符合から、地域社会の地主貴族が集まる機会である狐狩りが、政治的な結び付きを作り、また強める場ともなっていたと推測して間違いないように思われます。デイヴァーズはまた、同じ一七九〇年の暮れには、ベリ市の南二〇キロのメルフォードの狐狩りについても組織者の役割を引き受けています。この件は、ロンドンで出ていた『タイムズ』紙にも、デイヴァーズが近隣のジェントルマンの期待を集めているというように報じられています。ここでも彼は、地主貴族の集まる狐狩りを通じて、地域社会におけるその立場を強化していたのです。

もちろん狩猟以外のスポーツも、地域社会の地主貴族が

集まり結び付く機会を提供しました。一七世紀から一八世紀にかけて地主貴族の手で制度面の整備が進んだ競馬はその代表的なもののひとつで、彼らは馬主として（また初期には騎手としても）競馬を楽しみながら他の地主貴族と交流し、レースにおける勝利によってその名をさらに高めたのです。ベリ市の西方二〇キロに位置するニューマーケットは、全国的に名を知られた競馬の一大中心地であり、そのニューマーケットに近く、競馬とのかかわりも深かつたシュヴリに一七三二年まで土地を有していたデイヴァーズ家にとっても、競馬は身近なものでありました。一六九一年に、後の初代プリストル伯ジョン・ハーヴェイは自ら騎乗して競馬で勝利を得たのですが、その馬の名が「デイヴァーズ」であったというエピソードも、ここまで述べてきたことを考えあわせると、いっそう興味深く思われます。狩猟や競馬に代表される地域社会の爵位貴族や有力ジェントリが交流する機会は、一八世紀のイギリスには豊富にあり、地主貴族家門が他家門との結び付きを作っていく契機は、制度的にも保障されていたのです。

さらにもう一点付け加えるならば、中世末から一九世紀にいたるまでイギリスの地方統治の中心的な担い手となり、その名望家支配体制を体现する存在としてよく知られる治安判事の制度自体、州内の有力な地主貴族家門が、場

合によっては政治的には対立しながらも、地域社会の支配の安定のためには互いに協力するという理念を体現するものとなってしました。最後にこの点にふれて、この章を終えることにしましょう。

治安判事の任命は州単位でなされ、その任命状には州内の有力な地主貴族家門の名がならんでいました。治安判事を務めていた有力な地主貴族が死亡したのちには、それと入れ替わりのように、同一家門出身者が新たに治安判事のリストに加えられることが多く、有力な地主貴族家門は治安判事を出し、共同で統治にあたるのが当然であるといった考え方が一八世紀のイギリスにあつたことがうかがわれます。もちろん、中央政界における党派抗争が各州の治安判事の任命にまったく影響しなかつたというのではありません。例えば、一七一四年のハノーヴァ朝成立後にホイッグ政権がトリー系の治安判事を抑制する方針をとつた際には、トリーとして知られていたデイヴァーズ家のロバート、第二代准男爵の長男で、のちに第三代准男爵となる人物ですが、彼が治安判事を解任されるというようなことが起こりません。しかし、その父第二代准男爵ロバート、弟の第四代准男爵ジャーミン、甥の第五代准男爵ロバートと第六代准男爵チャールズは、すべて治安判事を務めており、政治的に野党色が強い場合でも、デイヴァーズ家の当主は有力

なジェントリとして治安判事には任命されていたと考えられます。

治安判事制度に関して、もう一点注意しておきたいのは、治安判事の任務が内容によつては複数の治安判事の合議によらなければならぬとされていたことです。例えば、救貧委員の任命や居酒屋の営業許可などの任務は、一人の治安判事が単独で執行することができず、複数の治安判事によらなければならぬのでした。また、一八世紀には、地方統治の上で重要な決定は四季法廷で行なわれることになつていましたが、その開廷期は近隣の地主貴族が顔をそろえる地域の大切な社交の期間でもありました。こうしたことは、地主貴族による支配が個々の家門単独の力では維持できず、地域社会内の諸家門の密接な結び付きがあつてはじめて安定するという、この講義で強調している論点と合わせて整合的で、地主貴族支配の本質を反映したものであると考えられます。

おわりに

この講義では、デイヴァーズ家の事例を中心に一八世紀イギリスの地主貴族による名望家支配についての考察を進め、地域社会内の地主貴族家門相互の密接な結び付きの重

要性を確認することになりましたが、残されている問題も少なくありません。その中でもっとも慎重に検討すべきもののひとつが、国家とのかかわりの問題です。

デイヴァーズ家の例を挙げれば、第二代准男爵のロバートは、アン女王治世のトリーの大物政治家ロバート・ハーリと親しく、彼に、自分の息子のロバートを官職につけることや、サフォーク州でトリーの治安判事を増やすことなどを依頼しています。地域社会における活動を重視したデイヴァーズ家のようなジェントリも、自家を経済的に安定させ、州におけるその政治的立場を強化するためには、中央政界で影響力をもった盟友を通じて国家の力を利用しようとしていたのです。このように、地域社会に生きる地主貴族にとっても、中央政界とのつながりはきわめて重要でした。この点は今日のお話では中心的な問題としてとりあげてきませんでした。地主貴族の名望家支配は国家との関係において考えられるべきことをあらためて指摘して、最終講義の最後としたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

付記

本稿は、二〇一七年三月一日に行われた筆者の立教大学文学部教授としての最終講義の原稿である。当日は、時間の関係から後半部分を大幅に短縮して読み上げるようになったが、ここでは、予定原稿をほぼそのまま掲載していただいた。

最終講義という性格から、詳細な史実についても典拠史料・文献を示していないが、そのほとんどは、サフォーク州、あるいはベリ・セント・エドマンズ市を扱う筆者の以下の著作に出しているものなので、それらを適宜ご参照いただきたい。

「有力ジェントリの条件 ― 一八世紀末イギリス・サフォーク州の一事例―」『史苑』六〇巻一号、一九九九年。

「一八世紀イギリス地方都市の下院議員選挙 一七五〇年代半ばのベリ・セント・エドマンズ市の事例」近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』（山川出版社、二〇〇八年）。

「私文書 ― 一八世紀イギリス地方都市の下院議員選挙の内実を知る」菅谷憲興編『人文資料学の現在Ⅱ』（春風社、二〇〇八年）。

「一七五〇年代ベリ・セント・エドマンズ市の下院議員

一八世紀イギリスの名望家支配と地域社会（青木）

選挙 ベリの都市自治体をめぐる補論 『史苑』 七十二
巻一号、二〇一一年。

（本学グローバル・リベラルアーツ・

プログラム運営センター特任教授）